慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アウグスティヌスの初期哲学的著作における教育思想：『教師論』に見られる「(初期)照明説」と「知」の伝達の問題を中心に
Sub Title	Educational theory in the early philosophical writings of Aurerius Augustinus: illumination theory and transmission of knowledge in "De Magistro"
Author	龍野, 隆(Tatsuno, Takashi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2011
Jtitle	哲學 No.126 (2011. 3) ,p.129- 154
JaLC DOI	
Abstract	This paper compares "De Magistro" which was written in the period of communal life in Tagaste, and "Epistola VII" which was addressed to Nebridius. And thereby it tries to deal with the relationship between the Reminiscence and the Illumination theory in the view of philosophy of education. Adoption of Illumination theory in "De Magistro" would be due to obscurity of the whole image of form which should be acquired through the internal recall after introduction of sensory experience to the concept of sign of the Reminiscence that would prompt internal recall by dialectic. The divine truth is only one and man cannot grasp the whole truth through the empirical recognition, for the human knowledge could always reveal only a part of the truth. Meanwhile "Epistola VII" describes the realistic epistemology that says it's impossible to grasp the knowable thing unless man should have the ability of a sensory after the incarnation because he could not acknowledge the form without sensory comprehension even with the Illumination. Reinterpretation of "De Magistro" in the context of "Epistola VII" reveals the position of sensory recognition in the Illumination theory. That is to say, perception of material things by the medium of sign is necessary to obtain the truth. The partial recognition obtained through internal reminiscence should be built into a whole form under the divine Illumination.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000126-0129

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

アウグスティヌスの初期哲学的著作における教育思想

――『教師論』に見られる「（初期）照明説」と「知」の伝達の問題を中心に――

龍　野　　隆*

Educational Theory in the Early Philosophical Writings of Aurerius Augustinus

—Illumination Theory and Transmission of Knowledge in "De Magistro"—

by Takashi Tatsuno

This paper compares "De Magistro" which was written in the period of communal life in Tagaste, and "Epistola VII" which was addressed to Nebridius. And thereby it tries to deal with the relationship between the Reminiscence and the Illumination theory in the view of philosophy of education.

Adoption of Illumination theory in "De Magistro" would be due to obscurity of the whole image of form which should be acquired through the internal recall after introduction of sensory experience to the concept of sign of the Reminiscence that would prompt internal recall by dialectic. The divine truth is only one and man cannot grasp the whole truth through the empirical recognition, for the human knowledge could always reveal only a part of the truth. Meanwhile "Epistola VII" describes the realistic epistemology that says it's impossible to grasp the knowable thing unless man should have the ability of

* 聖光学院教諭

a sensory after the incarnation because he could not acknowledge the form without sensory comprehension even with the Illumination. Reinterpretation of “De Magistro” in the context of “Epistola VII” reveals the position of sensory recognition in the Illumination theory. That is to say, perception of material things by the medium of sign is necessary to obtain the truth. The partial recognition obtained through internal reminiscence should be built into a whole form under the divine Illumination.

序

「『教師』と呼ばれてもいけない．あなたがたの教師はキリスト一人だけである．」

「マタイによる福音書」のイエスが，律法学者やファリサイ派の驕り高ぶりを戒めて述べたこの一言が，アウグスティヌスの教育観に大きな影響を与えたことは間違いない．アウグスティヌスは生涯にわたり一人の教師であった．20 歳の時にはタガステにて文法を教え，22 歳ではカルタゴ，30 歳の時にはミラノで修辞学を教授した．32 歳でカトリックの信仰を抱き教職を辞した後も，友人との討論を経て諸書をものしたほか，33 歳で受洗し 37 歳で司祭に就任して後は，聖職者として教導に当たったことは周知の事実である．「（唯一なる）教師キリスト」が，外的に人々を導く存在ではなく，内的存在として想起する者自身の意識を通じて人を教え導くものであることを知った時[1]，アウグスティヌスの教育観に大きな転機が訪れた．本稿では，アウグスティヌスの教育思想面での転換期にあたる，タガステでの共同生活時代（388〜390 年：アウグスティヌス 34〜36 歳頃）の教育思想を，同期の著作『教師論 (De Magistro)』と，ネブリディウス (Nebridius) に宛てられた「第七書簡 (Epistola VII)」を元に検討する[2]．

『教師論』は，アウグスティヌスの記号論や照明説に関するテキストとして，これまでも教育学や哲学の研究対象として度々取り上げられてきた

著作である．しかし，教育学的分野からの研究の中には，教授や学習といった今日の教育学的課題を，アウグスティヌスの教育的言説の中で読み解いて行こうという研究も多い．こうした研究の中ではアウグスティヌスの教育哲学そのものは分析の対象とはならず，アウグスティヌスの教育的著作の内で今日的課題に相応する表現を探すことが主な課題となりがちである[3)]．これに対し本稿は，アウグスティヌスの他の同時代的諸著作との比較検討によって『教師論』の再解釈を試み，教育的言説そのものの分析を論の中心に据えている点で，これまでの教育学的視点からものされた諸研究とは趣を異にしている．そのため，アウグスティヌスの教育哲学を思想史的文脈の中で解釈するにあたり，中世哲学に関わる先達の研究に多くを負うこととなった．特に，哲学史上の重要課題である「想起説」と「照明説」の問題を，教育哲学的関心から再検討することは，「教育」と「哲学」の両分野において多大の足跡を残したアウグスティヌスを研究する際に重要な視座であろう．こうした研究としては，既に茂泉昭男氏（『アウグスティヌス研究：徳・人間・教育』，教文館，1987年，p. 494）が，アウグスティヌスは『教師論』において知識の先在を前提とする内的想起（「想起説」）から神による内的照明（「照明説」）へと認識論上の立場を大きく転換した，との指摘を行っている．しかし，アウグスティヌスの哲学思想を膨大な著作群によって総合的に体系化し，その中で初期の教育思想について吟味するスタイルのこうした研究方法からでは，アウグスティヌスの教育思想は「照明説」において完成されたと考える立場を採らざるを得ない．『教師論』に到る諸著作で論じられた「想起説」の教育的価値を適切に評価するためには，『教師論』が著されたタガステ時代のアウグスティヌスが抱いていた教育思想を既に形成された一つの「体系」と捉え，その形成に至る展開を発展史的に検討する必要がある．林明弘氏（「想起説から照明説へ」in:『中世哲学研究，11号』，京都大学，1992年，pp. 13–23.）は既にこうした方法によって『魂の偉大』から『教師論』に到

るアウグスティヌスの思想的変遷を分析している．氏によれば，「想起説」から「照明説」への移行は，知識の形成過程において「記号の交換」よりも「感覚経験」を重視したことによる必然的結果である．感覚経験によって認識可能なのは，認識対象の「部分」にとどまり，人は「全体」を把握するために真理に相談するのであり，ここに感覚認識の限界とそれを補う形での「照明」の必要性が認識されたという．確かに『教師論』の論理展開からは，言葉による教授から感覚経験へと，知識獲得における主たる要素が移行していったとの指摘が読み取れるものの，『教師論』は知識獲得の手段としての記号の定義から言葉を決して排除していない．また，後に執筆された『キリスト教の教え (De doctrina christiana)』や『初心者の教導について (De catechizandis rudibus)』の中で，教育や司牧活動における「ことば（聖書作者によるものを含む）」の重要性が説かれていることを考えれば，『教師論』における記号論から言葉を排除し，「感覚認識」のみを「照明説」と結びつけて考えるべき積極的理由を見いだすことは難しい．本稿では以上のような先行諸研究成果を踏まえた上で，アウグスティヌスが『教師論』で展開する記号論において，言葉と感覚認識がどのような関係にあるかを整理し，さらに同時代的史料である「第七書簡」の記述をもとに，「神による照明」と感覚認識の関係を再考することで，タガステ時代のアウグスティヌスにおける教育哲学の一端を，「想起」と「照明」という論点から明らかにしたい．

1. 『教師論』に到る初期著作に見られる教育論

「三学」の教師としてその教師経歴を始めたアウグスティヌスにとって，学知の形成における問答法（弁証論）の重要性は，周知の事実であった．（ここで言う学知とは，主に自由学芸などの感覚的に把握可能（可感的）な世界を理解するための知識を指す．）このことは，『アカデミア派駁論』以降の初期の諸著作において具体的に言及されているところでもあり[4]，

更に初期の諸著作がプラトンのそれを模した「対話篇」の形式をとっていることからも窺うことが出来る[5]．ソクラテスやプラトンの系譜に属する哲学思想において，知識は様々な既知の諸前提から問答法を通じて導き出されるべきものと考えられていた．そのため，同系譜上の哲学に通暁していたアウグスティヌスにおいて，問答法は学知の形成において必要不可欠のものと意識されていたのである．とはいえ，キリスト教信仰を持つアウグスティヌスにとって，問答法によって探求されるべき知識は（プラトン的）イデアそのものではない．アウグスティヌスは問答法による学知形成の究極目的を真理の追究に置いている．アウグスティヌスにおける「真理」とはあらゆる知識の総体であり，神においてのみ実現する「知」である[6]．そして万物は神によって創造されたものである以上，神の被造物に関わる知識は何れも神の真理に依ってのみ存在している．それゆえ，人の「知」である学知は，問答法によって「神において実現する唯一の真理」へと高められるべきものと考えられていたのである．

一方，プラトニスムの伝統を承けたアウグスティヌスにとって，真理は人の内において存在するものであり（『秩序』第二巻8章25），常に記憶の底にありながら忘れ去られたものとしてそこにある現在的存在でもあった（『ソリロキア』第二巻20章35，『魂の不滅』第4章6）．学知の形成が，ある個人が有する知識を他の個人へ伝達することによって実現するものとは考えられていない以上（『魂の不滅』第4章5，『音楽論』第六巻13章42），人はこうした理念を精神のうちに「発見」することにより，知識を形成することとなる．こうした内的真理の存在を前提とする知識の獲得は，学知（の総体）を真理と同一視する「（アウグスティヌス的）想起説」を生む[7]．学知の形成を通じて人間は，真理の把握による至福への途を歩むことが出来るとの確信が当時のアウグスティヌスにはあった（『秩序』第一巻3章2）．このような姿勢は，神の被造物としての人間存在を意識したアウグスティヌスの，魂の知性認識能力に対する信頼の姿勢

と捉えることが出来よう．『秩序』においてアウグスティヌスは，既にこうした（人の知である）学知から（神の知である）真理への上昇の過程を説いている．人は（幾何学や星の運動や数の必然性などを支配する）「秩序」たる学識に従って，秩序の源泉たる「最も内なる」「最高の規範」への上昇を果たすことが出来る（『秩序』第二巻 5 章 14）．言い換えれば，自由学芸のような細分化された学知の修得は，唯一なる真理を把握するための基礎的過程として位置づけられているのである（同前，第二巻 16 章 44）．

上述のように，「内なる真理」の探究による学知の形成を旨とするアウグスティヌスの「想起説」は，問答法による学知の形成と一見矛盾するかのような観を呈している．問答法は人間間の，「言葉」という一定の社会的条件の下で認識される記号[8] の交換に基づく行為である．これに対し，想起説は内的真理の探究を旨としている以上，人間間の記号の交換過程に依存しない．とはいえ，記憶の内に埋もれた内的真理の発掘作業は，真理の存在を充分に意識し得ない一個人の良く為し得るところのものではない．対話を通じた記号の交換は，内的真理の存在を意識する契機となる．この意味で，「想起説」は問答法による人間間の記号の交換過程を，無意味なものとして排除しない．問答法は真理の一端を学知の形で明らかにする「発掘の手段」だったのである[9]．しかし，人間間の記号の交換による学知の形成が真理に到る途を明らかにするという「（アウグスティヌス的）想起説」の言説は，学知の直接的な延長線上に真理を配置している点で，神の存在を卑近なものとするかのような印象を与える．また，人間の知性認識能力に対する過度の信頼は，問答法による学知の認識を常に真理の一端と考える思考様式を生む．これらの諸問題は，『教師論』において，想起説における記号の役割が再考され，知の認識における神の役割が明確化されることで，解決へと導かれる．

2.　感覚認識による「想起」と「初期照明説」の関係

アウグスティヌスにおける「照明」とは，神の恩寵による「知」の啓示が人々を照らす「光」であるとの考えに基づいて使われる表現である．前述の「想起説」が内的真理の観想による知識の獲得であったのに対し，「照明説」では神なる真理による照明に知識獲得の根拠が置かれている点が大きく異なる．但し，神の「照明」にも幾つかの段階が想定されており，事柄そのものを真理に基づく「恩寵の光」に照らして判断する段階(判断の基準)，「恩寵の光」そのものの直視による真理の把握の段階，そして信仰を通じた魂の上昇によって「恩寵の光」の内において真理の内的観想を実現する段階（至福直観）がある．一般に『教師論』を中心とした著作における照明説は「判断の基準」の段階として「初期照明説」と呼ばれ，『告白録』や『三位一体論』における照明説は信仰による真理の把握を説いている点で，「後期照明説」と呼ばれる[10]．第II節では，一般に「初期照明説」によって説明される『教師論』における教育理論を，感覚認識との関係で再検討したい．

『教師論』は389年頃にタガステにおいて著された，息子アデオダトゥスとの「教えること」に関する対話の記録である．それは14章から構成されており，冒頭「話すことの目的」から始まる前半部分は，知識の伝達についての記号論である．言葉や身振りなどの記号は，コミュニケーションの手段としては必要不可欠の手段であり，言葉による聴覚を介しての伝達にしろ，身振りなど視覚を介しての伝達にしろ，記号は一定の概念を相手に想起させるものである．このことを前提に，「記号によらなければ何も教えられない」という立場が提示される．アウグスティヌスによるこうした主張は，「教える者」から「教えられる者」への情報の提供が常に記号によって為されるものであることを確認したものである．中盤の第7章でこうした対話についてのまとめが行われ，アデオダトゥスの理解が確

認された後，アウグスティヌスは一転して「記号によっては何も教えられない」という立場から認識論を展開する．記号はどのような観念も人から人へと伝達することはなく，教えられる者自身が当該事象に関する概念を事前に有していなければ，教える者はどのような知識も教えられる者に提示することは出来ないと言うのである．突然 180 度の方針転換が行われたかの観を呈する論の展開に関し，これまで研究者は docere（ラテン語で「教える」の意味）の二重性という表現で，整合的な説明を行ってきた[11]．『教師論』の前半部分において教育（「教えること」）を表す docere は「普通動詞」として用いられており，ここでは人間間の記号の交換（情報伝達など）を示すために使われている．一方，同書の後半部で用いられた docere は一種の「固有動詞」（大文字で始まる Docere）として用いられており，神による照明――神が「教える」行為――のみを表しているというのである．こうした解釈自体に全く異論はない．『教師論』における第 7 章以前の「記号によらなければ何も教えられない」との主張と，第 8 章以降の「記号によっては何も教えられない」との主張は，前半を人間間の情報伝達，後半を神による照明に関わるものと解釈することで，何の矛盾もなく理解することが出来る．また，大文字の Docere を強調する解釈は，聖三位一体論に基づく「唯一の教師なるキリスト」の思想とも合致する．「唯一の真理なる神」の照明は，「神の真理なるキリスト」を通じて人を照らすのである．ただし，（人による）docere と（神による）Docere との間の関係の考察には，より一層の慎重さが必要となる．

本稿でこれまで検討して来たような『アカデミア派駁論』から続く「問答法を通じた想起」の伝統（想起説）は，人による docere を学知獲得の手段としているものである．「想起説」では，教える者から教えられる者へ直接の形で知識が伝達されると考えられている訳ではないものの，常に教えられる者は教える者による記号の提示 (docere) によって，内的想起へのきっかけを掴むのである．一方，司牧生活に入った後のアウグスティ

ヌスは，信仰による「神の照明」の深化を経験した結果として，『教師論』の頃の「初期照明説」から晩年の「後期照明説」に至るまでその認識論を発展させていくこととなる．将来のアウグスティヌスに見られるこうした認識論上の展開を前提として論を再考する時，『教師論』で論じられている，知識の獲得過程における「教える者」と「教えられる者」との関係についても，神の照明 (Docere) による介在が知識獲得過程において最も重要な役割を果たすべきものとの見解が『教師論』執筆時のアウグスティヌスの念頭にあったと想定することも可能かもしれない．事実，司教就任後から晩年の「後期照明説」に関わるアウグスティヌスの諸著作における記述（ex.『再考録』第一巻 4 章 4）は，こうした docere-Docere 関係の想定を裏付けており，感覚的経験 (docere) の限界と真理の光による照明 (Docere) を強調する研究者の立場からも[12]，また，学知と真理の区別をもって「照明説」の成立を説く立場からも[13]，同様の結論が導き出されている．しかし，『教師論』の 8 年後に（第 3 巻までが）著された『キリスト教の教え』において強調される「人を通して」行われる知識の伝達に関する記述を見る時，『告白』・『三位一体論』を経由して最晩年の『再考録』に至るまで，アウグスティヌスが知の獲得過程における「神の照明」への依存度合いを一方的に強めて行くような解釈の仕方には，やや疑問を感じるのである[14]．確かに晩年のアウグスティヌスは神秘主義的傾向を強め，『再考録』に見られるその認識論にも神の恩寵的性格が顕著となるものの，その記述は多くの場合晩年の思想傾向から初期の哲学的著作を文字通り再考するものであり[15]，アウグスティヌス自身の思想的変遷をクロノロジカルに示すものとは言い難い．「初期照明説」に見られる「神の照明 (Docere)」は，「想起説」に反するものではなく，想起によって獲得された「事実」の判断基準として導き出されたものである．つまり，「神の照明」はあくまでも「教える者」から「教えられる者」への記号の提示 (docere) による内的想起を前提として，想起内容の事実認証を確保する手

段として発想されたものなのである．このことが敢えて問題となる背景には，アウグスティヌスにおける記号論が，単なる「言葉のやりとり」（問答法）から，事物の認識一般に拡大していったことが背景にある．つまり，『教師論』においてアウグスティヌスは，「記号＝言葉」を前提に成立していた問答法による想起を越えて，「記号＝なにかあるものを表示するいっさいのもの（『教師論』4 章 9）」という等式から導き出される新たな知識の獲得方法を模索するに到ったのである．ここに至り，アウグスティヌスの記号論は，問答法による想起から，言葉を含むあらゆる感覚経験による「想起」へと，知識獲得の方法（「真理」への途でもある）を大きく転換した．その結果，感覚経験から導きだされた「内的想起」の判断基準として，神の照明が導き出されたのである．

3. 「照明説」における経験認識の位置づけ

アウグスティヌスの照明説における経験認識の問題については，管見の限り既に 1930 年代から 1940 年代にはヨーロッパにおいて研究者の関心の対象となっていたようである．例えばヨハネス・ヘッセンは，アウグスティヌスにおける経験論をプラトニスムに見られるイデア至上主義的な思想を凌駕するものと評価している．「照明」は理性のみによって判断されるべき（可知的な）もののみならず，感覚によって把握される（可感的な）ものについても，それが実存在であることや，如何なる性質のものであるかを精確に判断する際の根拠となるものである[16]．また，フランスのエティエンヌ・ジルソンも，アウグスティヌスの思想における「照明」の役割を評価して次のように述べる．「照明」とは人において如何なる概念を形成するものでもないが，それが法則を定立し原型を定義することによって，経験から獲得された可感的な事物について，その完全な形を判断する際の根拠を与えてくれるものである[17]．確かにアウグスティヌスにおいて経験は，単なる臆見（ドクサ）にとどまらず，認識を構成する重要な要素を成し

ている.「想起説」では内的想起による真理の獲得が図られ,「初期照明説」では神の照明による真偽の判断が説かれているものの，自由学芸などの学知は常に記号によって経験を通して獲得されるものであると主張される点では共通しており，何れの場合にもアウグスティヌスにおける経験認識の重要性は否定すべくもない．第3節では，経験によって獲得される「知」の認識と「(神による）照明」の関係を,『教師論』における論の展開から検証することにより，第2節で充分に明らかにし得なかった「初期照明説における “docere” の位置づけ」を明確にしたい.

『教師論』の第11章から第14章は同書のまとめにあたる部分であり，第7章までの「記号によらなければ何も教えられない」との主張と，第8章から第10章までの「記号によっては何も教えられない」との論の対立を止揚している点で，まさに弁証論的展開を見せる．まず，先に述べた「神による照明」を真の教育 (Docere) とする主張については，アウグスティヌスによる以下のような表現から確認することが出来る.

> De uniuersis autem quae intellegimus, non loquentem qui personat foris, sed intus ipsi menti praesidentem consulimus Veritatem, uerbis fortasse ut consulamus admoniti. Ille autem qui consulitur docet, qui in interiore homine habitare dictus est Christus, id est incommutabilis Dei atque sempiterna sapientia. (II, 11, 38)
>
> 「しかし我々が知性によって知りうる一切のものごとについては，我々は〔身体の〕外部で反響している言葉を話している者にではなく，心の中で自分自身の精神を支配している『真理 (Veritas)』に相談するのである．そして，恐らく〔耳に響く〕言葉 (verbum) は，〔内的真理に〕相談するよう (consulamus) 促すものなのである．そして，教え給うのは，我々の相談を受けて下さる方，人の内に住むと

言われる方たるキリストその方なのである．キリストこそは，変わることなき，永遠の神の知恵である．」（11 章 38）

ここで言われている「真理 (Veritas) への相談 (consulamus)」とは，『教師論』の各所において説かれる「真偽の判断基準」である「（神の）照明」を示すものである．このことは，続く部分で「キリスト」と言い換えられた「内なる真理」こそが「教えるものである」と説かれていることからも判断できる．また，原文中の “verbis” の語は，小文字で表されているところから「（内的）真理」の言葉ではなく，「（耳に響く）言葉」の意味であろう．この表現からも，言葉は「（神の）真理」への相談を促す働きを持つものであるとの考えが窺える．

一方，「照明説」の表現は「後期照明説」から遡って『教師論』に対しても適用される表現ではあるが，『教師論』に限定する限り，神が「照明する (illumino)」という表現はどこにも見あたらない．但し，次の引用部分に見られるように，物事を判断する際の相談相手たる神の真理は「光 (lux)」と呼ばれ，「創世記」第 1 章の「神の知恵（万物の形相）」としての「光」や，「ヨハネによる福音書」第 1 章の「人間を照らす光」を想像させる．

Et si quando fallitur, non fit uitio consultae Veritatis, ut neque huius quae foris est lucis uitium est, quod corporei oculi saepe falluntur, quam lucem de rebus uisibilibus consuli fatemur, ut eas nobis, quantum cernere ualemus, ostendat. (II, 11, 38)

「もし誤ることがあるとすれば，それは相談を受けた真理に何か欠陥があるということではない．しばしば身体の一部である眼が誤るからといって，それが眼に入ってくる光の欠陥によるものではないのだか

ら．そして視覚可能な事物については，我々が見分けることが出来る限り，我々にそれが示されるよう，この光に助言が求められるのである．」（11章38）

ここでもアウグスティヌスは人間の感覚認識が誤りを犯す可能性を指摘した上で，真偽の判断については光(lux)との相談によるものとしている．この引用箇所からは「照明」の概念が明確に指摘出来るものの，唯一の真理たる神の光は，真偽の判断基準として「相談を受ける(consultum)」存在であり，「照明」が神による積極的な教育(Docere)であることを示唆する表現は何もない．一方，判断基準たる「真理」の位置づけを明確にしているのが以下に引用した部分である．

> Cum vero de his agitur, quae mente conspicimus, id est intellectu atque ratione, ea quidem loquimur, quae praesentia contuemur in illa interiore luce Veritatis, qua ipse qui dicitur homo interior inlustratur et fruitur; . . . (II, 12, 40)
>
> 「しかし，我々が精神によって――つまり知性や理性によって――認めるものについて論じる時，我々は確かにかの内的な「真理」の光の中で観察されるものについて語っているのである．そしていわゆる「内なる人(homo interior)」は，この光によって照明をうけ(inlustratur)，この光によって喜びを得る(fruitur)のである．」（12章40）

真理(Veritas)は内的存在として意識されると共に，「真理の光(lux Veritatis)」の表現より，真理は光として人の心を照らすものであると想定される．なお，inlustror (illustror)の語は「（光に）照らされる」という意味を持ち，人の内に存在する内的真理が，さらに唯一の真理たる神に

よって照明を受けるものとの意味で用いられている．『教師論』の当該箇所のみからでは十分な証明は困難なものの，聖三位一体論を前提に考える時，「唯一の真理なる神」による恩寵の光は，「神の真理なるキリスト」として人の内的真理（「内なる人」[18]）を照らすものであるとの考えかたを暗示しており，「唯一の教師キリスト」による教育 (Docere) の思想が暗示されているものと言える．これに対し，人間による教育 (docere) との関係を示したのが以下の箇所である．

> Nam quod saepe contingit, ut interrogatus aliquid neget atque ad id fatendum aliis interrogationibus urgeatur, fit hoc imbecillitate cernentis, qui de re tota illam lucem consulere non potest; (II, 12, 40)
>
> 「確かに，何かを問われた者が拒んだ場合にも，別の質問によって容認するよう迫られることがしばしばある．このことは，物事の全体を光に諮ることの出来ない無力さによるものと思われる．」（12 章 40）

学知の形成過程における問答法と照明の関係が示されている．人は「上手に問われることにより」真理を把握することが出来るというプラトン的想起説[19] の影響を受けたアウグスティヌスは，前節までに述べたように，『教師論』に至る過程で問答による真理の探究を学知形成の手段として是認していた．しかし，ここでは問答による認識は常に部分的なものに留まることが指摘されている．事物の全体的把握はあくまでも神の真理に属する領域のものであり，人間にとって部分的認識の積み重ねなしに，事物の全体的把握をすることは不可能である．人は言葉を初めとする記号によって事物を認識するのだが，それが真であるかどうかは認識された「部分」が「真理の光」に照らして真実であるかどうかに委ねられている．真理の探究における記号の役割を再考する過程で，アウグスティヌスは「想起」

から「照明」への認識方法上の展開を意識したものと考えられる．但し，本稿では，アウグスティヌスの認識論が後に「初期照明説」から「後期照明説」へと発展していくことを前提に，『教師論』時代の言説をも「神の照明に対する絶対的な帰依」という観点から分析する従来の説ほど，「人による教育 (docere)」の地位を貶めようとは考えていない[20]．アウグスティヌスは「人による教育」の可能性を――その限界を感じながらも――信じていた．そのことを確認するためには，『教師論』の最後にあたる結論部分の訳出に関し，若干の問題点を指摘する必要がある．

> Quid sit autem “in caelis”, docebit ipse, a quo etiam per homines signis admonemur foris, ut ad eum intro conuersi erudiamur . . . (II, 14, 46)
>
> 「しかし『天に　(“in caelis”)』あるものが何なのか，神自身が教えてくださるだろう．そして，外部から人間を介して提示される記号によって，内部の神へと転向することで教えを受けるようにと我々は勧められているのである．」（14 章 46）

本稿が問題としたのは，中程の “per homines signis admonemur foris” と末尾の “ut ad eum intro conuersi erudiamur” の関係である．両者を「内的には神に向けて転向せしめられ」，「外的には人間を通じて教育されるように」という形で，神による真理の提示と，言葉による感覚的把握とが対比されている部分であると解釈することも可能ではあると思う[21]．しかし “ut” の後に接続法動詞をもつ “ut . . . erudiamur” の部分は，前段の “per . . . admonemur foris” の目的と考えるのが自然なのではないだろうか．アウグスティヌスにとって人間間の記号による教育活動 (docere) は，神による真理の照明 (Docere) へと人を誘うものであったことは確かである．なお，両論併記的な論の展開を避けるため，同時代的記

述である「第 7 書簡 (Epistola VII)」の記述をもって，docere-Docere 関係に関する考察のまとめとしたい．

4. 経験認識を通じた「真理」の把握の可能性

アウグスティヌスからネブリディウスへの書簡 (Epistola VII: 387/388) は，主にアウグスティヌスにおける「魂の先在」や「記憶の現在性」を研究する際の一次史料として，欧米の研究者らによって利用されてきたものである．ここでは，同書簡が『教師論』執筆の直前の時期に交わされたものであるとの考え方に基づき，『教師論』における docere-Docere 関係を類推するための史料としてこれを検討することとする．

「第七書簡」は，本稿が問題としている「教えること」を巡る『教師論』執筆の意図と符合する部分を多く含む．その書式はネブリディウスから寄せられた書簡への返書の形をとっており，ネブリディウスからアウグスティヌスへの書簡（「第六書簡 (Epistola VI)」）と比較することにより，その執筆意図は容易に明らかにすることが出来る．

“Epistola VI, Augustino Nebridius”

Cur, quaeso te, non a se potius quam a sensu phantasiam habere omnes imagines dicimus? Potest enim quemadmodum noster animus intellectualis ad intellegibilia sua uidenda a sensu admonetur potius quam aliquid accipit, ita et phantasticus animus ad imagines suas contemplandas a sensu admoneri potius quam aliquid assumere. Nam forte inde contingit, ut ea quae sensus non uidet ille tamen aspicere possit, quod signum est in se et a se habere omnes imagines. (Epist. VI)

『第六書簡；ネブリディウスよりアウグスティヌスへ』

「あなたに尋ねよう，どのようなイメージ (imago) も表象 (phantasia)

を持つにあたり，感覚によるよりもむしろ自分自身によるということはないと我々が言っているのはなぜであるか．なぜなら，我々の知性に関わる魂が，何かを受け取るよりもむしろ感覚によって可知的事物を見るように促されるような方法で，表象に関わる (phantasticus) 魂は何かをもとめるよりもむしろ感覚によって，それ自体のイメージを観察するよう促されるのである．すなわち，感覚によっては見えないものを魂が眺めることが出来たり，全てのイメージが記号が表すものを自らにおいて，そして自らによって恐らく所有することが出来るようになるのである．このことについてあなたが感じることを何か詳細に説明してもらいたい．」（第六書簡）

“Epistola VII, Nebridio Augustinus”

Memoria tibi uicetur nulla esse posse sine imaginibus uel imaginariis uixix, quae phantasiarum nomine appellare uoluisti. Ego aliud existimo. (Epist. VII, 1)

『第七書簡；アウグスティヌスよりネブリディウスへ』

「あなたが表象の名で呼ぼうと望んでいるところのイメージや，そのイメージの力がなければ，記憶は意味を成さないとあなたは考えているが，私はそれは違うと思う．」（第七書簡，1）

ネブリディウスが提起した「魂は，その内部のイメージ (imago) を観察することにより，記号が示すものを自らの内部で所有することが可能であり，これによって感覚では捉えられないものを観想することが可能である」という主張は，文中の表現（「我々が言っている」）より，当時の知識人層（又はアウグスティヌスを中心とする知的サークル）における一般的解釈であったと想定される．本稿で「イメージ」と訳した imago の語は，プラトニスム的な意味での「想起」を表すものとも考えられ，可知的なも

のを重視する姿勢が感覚認識を否定的に扱っている思想状況をも想定することが出来る．これに対してアウグスティヌスは，ネブリディウスによって提起されたこうした主張を正面から退けており，次の引用箇所に見られるように，可知的認識と区別された可感的認識が主張されている．

> Iam uero quod tibi uidetur anima, etiam non usa sensibus corporis corporalia posse imaginari, falsum esse conuincitur isto modo: (Epist. VII. 3)
>
> 「また，確かにあなたが，肉体的な感覚を用いることなしに，物体的なものを魂の働きによって認識することが出来るということ．このことが偽りであるということは，次のような方法によって確認することが出来る．」（第七書簡，3）

しかし，このことは感覚認識に対する十全の信頼を意味しない．それどころか，次の引用箇所に見られるように，永遠不変の真理の存在を前提とした論の展開は，「神における真理」の観想による「知」の獲得を重視する姿勢を示したものといえる．

> Licet igitur animae imaginanti ex his quae illi sensus inuexit demendo, ut dictum est, et addendo ea gignere, quae nullo sensu attingit tota, partes uerro eorum in aliis atque aliis rebus attigerat. (Epist. VII. 6)
>
> 「上述の如く，どのような感覚によっても完全には到達出来ないようなもの，しかしそれらの一部であれば他のものによって，そして他のものの中において達することも可能なものを，感覚がもたらしたものから取り除くことによって，象られた魂が生ずることもある．また，それを加えることによって魂が生ずることもあるのである．」（第七書

簡，6）

これは魂の存在様式[22]について論じた箇所であるが，本稿では「どのような感覚によっても完全には到達できないようなもの」・「それらの一部であれば……達することもありえるようなもの」との表現に注目したい．これらの表現は「部分と全体」の対照を通じて，感覚認識の可能性と限界を示したものであり，『教師論』12章40節に符合する部分を見いだすことが出来る．感覚認識によって獲得出来る「知」（『真の宗教』第四部30章54で「経験によって言われるところの術（茂泉昭男訳）」と表現されている）は現世的な「知」すなわち「学知」であり，多くの誤謬を含む危険性を否定出来ない．しかしそれは「感覚によっては到達出来ないもの」すなわち「神の真理」に依存して存在しており，感覚認識を通じた「学知」の獲得は，「真理」に到る途として（誤謬を排除することによって）魂を形成することにもつながる．また，docereは（誤謬を含むものとして否定的に）神の教育(Docere)に併置されるべき単なる「外的認識」であるに止まらず，Docereの前提として，「神の照明(Docere)」に諮るべき内的知識の形成過程として，人がDocereを受容するに必要不可欠の前提を成すのである．このことは「第七書簡」の結論部分で明確に主張されている．

Ex quo intellegas uelim, cum tam multos animi motus esse sentias, expertes omnium de quibus nunc quaeris imaginum, quolibet alio motu animam sortiri corpus quam sensibilium cogitatione formarum, quas eam, priusquam corpore sensibusque utatur, nullo modo arbitror pati posse. (Epist. VII. 7)

「あなたはそこから認識すべきであると思う．なぜなら，魂の運動のこれ程多くが，今あなたがイメージを探求している万物の部分である

ということを，あなたは知覚すべきであるから．また，諸形相についての考えについて，感覚以外のどのような魂の働きによっても，肉体が魂を手に入れることが出来たとは，また，それが肉体と感覚を持つ以前に，形相を受け入れることが出来たとは，私にはどのようにしても信じられないのである．」（第七書簡，7）

神による照明に基づき，形相を承けるのは受肉後のことであり，感覚認識を抜きにして可知的事物を把握することは出来ない．よって「人による教育 (docere)」は「神の真理による教育 (Docere)」の必要不可欠の前提であると共に，Docere は docere の目的なのである．

5. 結論:「人間による教育」から「神による教育」へ

「初期照明説」における感覚認識の位置づけを探る考察は，「人を通した（言葉を含むあらゆる種類の）記号による教育」が，真理の獲得における必要不可欠の前提であるという結論を提示するに到った．これがタガステ時代のアウグスティヌスが『教師論』において示した教育思想である．こうした人間の感覚経験を重視する姿勢は，『教師論』の翌年著された『真の宗教』（第四部 24）や，4 年後（393 年）の著作『未完の創世記逐語註解』（第 5 章 24）でも繰り返し主張された．アウグスティヌスはその後も教育を巡る思索を深め，397 年には聖書解釈の規則を説いた『キリスト教の教え』の第 3 巻までが，400 年には牧会的な教導書である『初心者への教導について』が著される．特に，『キリスト教の教え』では聖書解釈における記号の重要性が説かれており[23]，「人を通して」行われる教育が再び強調された[24]．『初心者への教導について』で勧められた教導のための説教（ナラティオ (narratio)）は，その実践的方法と考えて良い[25]．一方，キリスト者としての経歴を積む中で，アウグスティヌスの「照明」を巡る哲学も発展を続け，『告白』や『三位一体』においては，神の恩寵に

よる真理の直接観想（至福直観）が説かれるに到った（「後期照明説」）[26]．「人による教育」と「神の恩寵による照明（教育）」，この一見相矛盾するように見える両テーゼが，アウグスティヌスの信仰心の深まりとともに同時並行的に深まりを見せる．もちろん，両テーゼに矛盾などある筈はない．ドナティスト相手の論争の渦中にあったアウグスティヌスにしてみれば，「ただ成されたる神の御業による (ex opere operato)」サクラメントの正当性を説くことは，即ち神の真理の「普遍性」を説くことでもあり，個々人の主観や誤謬に左右されない神の真理の「不変性」を主張することにもつながったのである（cf.『キリスト教の教え』第四巻 27 章 59）[27]．こうして，『教師論』で提示されたテーゼ「（外部から言葉によって教えを説いている者ではなく，内的に）想起している者が（自分自身を）教えているのである (docere illum qui commemorat)」は，「神の真理」の感覚的認識を通じた想起として，人類共通の普遍的認識の獲得を志向するものとなった．感覚知から「神の真理」へ到る「上昇の途」は，『教師論』に至る諸著作を通じて，そして『教師論』以降の諸著作における認識論の展開の中で，我々の前に提示されている[28]．我々人間は，感覚経験から「（神の）真理」に至る「知」の階段を，ただ信仰心によって上りさえすれば良いのである．この上昇の途を辿ることによって，細分化された人の知が，神の下における普遍的な知の体系の一端を成すものであることが自覚的に認識されるであろう．それが救いに到る途だと，アウグスティヌスの教育思想は説いている．

註

1) 『教師論』第 12 章 40．キリストを「教師」として知恵の源と考える思想は，『秩序』（第一巻第 11 章 32）に既に見られる．更に『音楽論』（第六巻第 16 章 52）では，キリストは「光」「神の知恵」と明確に表現され，「照明説」の思想形成の一端を窺わせる．但し，学知から信仰への上昇による「知恵への唯一の道」としてキリストを位置づける表現は，『教師論』以降の著述に

おいて特に強調されるものである．このことは晩年の著作（『再考録』第一巻 4 章 3，同 11 章 1）における記述からも窺われる．

2) 主な検討対象史料は，“Epistola VII，Nebridio Augustinus (a. 387/388), responsio ad epst. VI” in: *Aurelii Augustini opera, Epistulae I–LV*, Corpus christianorum, series latina XXXI, Turnhout, 2004. と “De Magistro” in: *Bibliothèque Augustinienne, OEuvres de St. Augustin 6, Dialogues Philosophiques III, De Magistro, De libero Arbitrio*, Paris, Institut d'Etudes Augustiniennes, 1999. である．後者については石井氏と三上氏による訳（『教師論』，明治図書，1981 年）を参考にしたが，本稿では若干の提案を込めて試訳を行った．アウグスティヌスの他の著作については教文館の『アウグスティヌス著作集』を参考にした．

3) 近年のものでは，［島本清久，「アウグスティヌスの教師論における「真理に関する研究―「教師」と「学ぶ者」の関係を中心に―」in: 中国四国教育学会，『教育学研究紀要 46』，2000 年，pp. 7–11.」］や，やや歴史的視点を交えたものとして［岩村清太，「アウグスティヌスによる教授と学習―『教師論』を中心に―」in: 同『アウグスティヌスにおける教育』創文社，2001 年，pp. 196–224.］など．

4) 『アカデミア派駁論』第三巻 13 章 29，『秩序』第二巻 13 章 38，『ソリロキア』第二巻 7 章 14 など．

5) アウグスティヌスの著作における最後の対話篇が『教師論』である．このことに関しては，茂泉氏によって既に言及されているところであるが，同氏は『教師論』を他の対話篇と同様の思考様式の中で著述されたものと見る見方には否定的である．（茂泉昭男，『アウグスティヌス倫理思想の研究』，日本基督教団出版局，1971 年，p. 74 f.）

6) アウグスティヌスの用語法による「真理」とは，今日の自然科学に見られる経験則的なもの（「仮説の検証によって命題や法則が真であると証明されること」）とは異なり，あらゆる可感的・可知的存在の法則性を越えた唯一なる法則を指して用いられる．このような法則は，唯一の神においてしか見出されない．（cf.『真の宗教』第四部 36 章 66）．

7) 中川氏は学知と真理の同一視を，『ソリロキア』における論理展開からの帰結と論じている（中川純男，『存在と知　アウグスティヌス研究』，創文社，2005 年，p. 186）．しかし学知と真理の同一視は，『アカデミア派駁論』における懐疑派論駁の過程で形成された論理なのではないだろうか．（cf.『アカデミア派駁論』第二巻 3 章 9，第三巻 3 章 5）．『ソリロキア』においてアウグスティヌスが示した学知と真理の同一視は，本稿で論じた様に，魂の知

性認識能力に対するアウグスティヌスの信頼の姿勢によって深化したものと考えるべきである．

8) アウグスティヌスが記号に関する明確な定義づけを行うのは，主に『教師論』と『キリスト教の教え』であるが，両著における記号の定義に若干のずれがあることが，「想起説」と「照明説」という二つの真理認識の方法論上の問題とも関係している．

9) 問答法は早くから学知形成の有効な手段として意識されていた．記号を通じた知識の「把握」という考え方は，『アカデミア派駁論』では「臆見」として部分的には否定的に扱われているものの，少なくとも『ソリロキア』以降の著作においては学知を感得する手段として肯定的位置づけをもって語られる．（cf.『魂の不滅』4章6.）

10) 加藤信朗「CONSULERE VERITATEM―アウグスティヌスの初期照明説をめぐる若干の考察―」p. 21 f.（in: 中世哲学学会，『中世思想研究 18』，1976年，pp. 21–44）．但し，想起説と照明説を分ける基準については諸説あり，基準の設定次第で「想起説」・「初期照明説」・「後期照明説」の区分にも差異が生じる．

11) 加藤武，『アウグスティヌスの言語論』，創文社，1991年，p. 258 f.

12) 林明弘，前掲書，pp. 18–20.

13) 中川純男，前掲書，p. 119 f.

14) プラトンの著作中のソクラテスが，知の獲得過程における経験を重視し，イデアによる概念の獲得を魂の先在から説明する（cf. Phaedo, 70c–77a in: プラトン（岩田靖夫訳）『パイドン』，岩波書店，1998年，pp. 47–68）のに対し，アウグスティヌスは神の照明による概念認識を説く．それゆえ，アウグスティヌスが知の獲得過程において照明説の果たす役割を重視していることについては言を待たないが，過去の経験に基づく記憶と照明の関係については，アウグスティヌスの多様な著作を論拠に若干の論の対立がある．Hessen, J. (*Augustins Metaphysik der Erkenntnis*, Berlin und Bonn, 1931, esp. p. 60 f.) が「経験を認識する手段としての照明」を重視するのに対し，Gilson, E. (*Introduction à l'étude de Saint Augustin*, Paris, 1949, esp. pp. 137–139.) はアウグスティヌスに「神の知の偏在による記憶の現在性」を読み解き，照明による認識は必ずしも過去の経験を必要としないと主張する．ジルソンの主張は「知の獲得過程における照明の役割」に関し Bubacz, O'Daly, O'Connell, Rieck, Tske らによる論争を呼んだ．[Bubacz, B. Augustine's Illumination Theory and Epistemic Structuring. in: *Augustinian Studies, 11*, 1980, pp. 35–48.] [O'Daly, G. J. P., Did St. Augustine

Ever Believe in the Soul's Pre-Existence? in: *Augustinian Studies, 5*, 1974, pp. 227–235.] [O'Connell, R. J., Pre-existence in Augustine's Seventh Letter in: *Revue des études augustiniennes 15*, 1969, pp. 67–73.] [Rieck, J., De Magistro and Augustine's Illumination Theory in: *Reality 12*, 1964, pp. 95–115.] [Teske, R. J., Platonic Reminiecience and Memory of the Present in St. Augustine. in: *The New Scholasticism, 58*, 1984, pp. 220–235.] これらの論の多くは初期哲学的諸著作の他,『告白』や『三位一体論』で展開される哲学的・神学的な学習論・認識論を論拠とする. 一方, 司祭叙階後のアウグスティヌスは『主の山上の教え』や『キリスト教の教え』などの司牧的諸著作を著し, 共同知性による概念認識への傾向をも示す. この点については我が国でも加藤武氏による論考(「mit-teilen としての伝達—*De Doctrina Christiana* における docere の構造—」in:『立教大学研究報告, 人文科学, 45』, 1986 年, pp. 18–41.)があるものの, 今日なお, 知の獲得過程に関する研究は『教師論』における照明説を中心に行われている. (なお, [神門しのぶ「アウグスティヌス教育思想研究の問題点」in:『教育哲学研究　第 101 号』2010 年, pp. 59–78] は, こうした照明説中心の研究状況を,「ギリシア哲学的要素偏重」としてその問題点を指摘している.)

15) 例えば『ソリロキア』に関する再考の箇所では次のような言及が見られる.「うまく質問された場合に, その学問の真なるものについて答えることが, 信じられるとすれば, それは, 彼らがそれを把握する限りにおいて, 永遠の理性の光が現存しているからである. ……それらの真なるものを, ある時知っていてそれを忘れたから〔思い出す〕というのではない. プラトン派の人々の意見に対しては, わたしは考えていた作品に機会が与えられている範囲で『三一神論』第一二巻で論じた.」(『再考録』第 1 巻 4 章 4: 清水正照氏の訳による)

16) Hessen, J., *op.cit.*, p. 60 f.

17) Gilson, E., *op.cit.*, p. 123.

18) アウグスティヌスの諸著作においては, 魂(＝内なる人)は真理そのものであるという思想が随所で展開されている. (ex.『ソリロキア』第二巻 19 章 33.) このことは「魂の不死」の問題とも絡む重要な問題なので, 別稿にて詳細に論じたい.

19) Phaedo, 73a, b. (in: プラトン, 前掲書, p. 55.)

20) cf. 茂泉昭男, 前掲書, 1987, p. 502.

21) cf. 石井・三上訳,『教師論』, p. 89.

22) 魂は，それが獲得する知識との類似性を持つとの主張が，アウグスティヌスには見られる．（cf.『三位一体論』第九巻11章16）

23) 『キリスト教の教え』第二巻1章1・2．但し樋笠氏は，『教師論』における記号論がコミュニケーション的なものであり，『キリスト教の教え』における記号論は象徴的解釈を強調する点で，両者の記号論には大きな相違があるという．本稿でも，氏の指摘する象徴的記号論については，『教師論』においてアウグスティヌスが考察した「記号を通じた感覚経験」からは排除されるべきものと思う．（樋笠勝士，「反省的言語としての文法論―アウグスティヌス『教師論』における「文法的意味」の射程―『教師論』研究1」p. 280. in: 神田外語大学，『神田外語大学紀要12』，2000年，pp. 273–287）．

24) 『キリスト教の教え』序章8．加藤氏はこれを評して「『教師』では潜在的に述べられていた言葉の有用性 (utilitas uerborum) が，『教え』において積極的に述べられる．……「人なしにでなく人を通して」．ここに『教師論』に対する『キリスト教の教え』の新しさがある．」（加藤武，前掲書，1991年，p. 289）と説く．しかし『教師論』において「言葉の有用性」は，決して「潜在的」に主張されていたものではなく，アウグスティヌスの思想的伝統の中核に位置づけられるものである．

25) 神門しのぶ，「教授方法としてのナラチオ―アウグスティヌス『教えのてほどき』を手がかりに―」in: 上智大学教育学研究会，『上智教育学研究21』，2007年，pp. 17–32.

26) ex.『告白』第十三巻18章23，『三位一体論』第二巻13章31.

27) なお，人間による「（神の）不変的真理」の普遍的所有状況を，「知の共有」という観点から説明した加藤武氏の論文（前掲書，1986年）からは多くの教示を得た．

28) 『魂の偉大』第四部第34章77，『真の宗教』第四部26章49，『キリスト教の教え』第二巻7章9～11，『三位一体論』第四巻18章24など．

主要参考文献

- 中川純男『存在と知―アウグスティヌス研究―』，創文社，2005年.
- 林明弘「想起説から照明説へ」（『中世哲学研究，11号』，京都大学，1992年，pp. 13–23.）.
- 加藤武『アウグスティヌスの言語論』，創文社，1991年.
- 茂泉昭男『アウグスティヌス研究：徳・人間・教育』，教文館，1987年.
- 加藤信朗「CONSULERE VERITATEM―アウグスティヌスの初期照明説をめ

ぐる若干の考察—」（中世哲学学会『中世思想研究 18』，1976 年，pp. 21–44）.
- 茂泉昭男『アウグスティヌス倫理思想の研究』，日本基督教団出版局，1971 年.